

保健体育担当教師の生活意識と生活 構造に関する研究

——他教科担当教師との比較——

西 垣 完 彦

はじめに

一般に保健体育担当教師（以下、単に「体育教師」という）の生活には、他教科担当の教師と比較していくつかの点で差異が見出されるといわれている。しかし、こうした指摘のなかには、じゅうぶんな調査研究にもとづいて実証的に明らかにされたというよりは、むしろ体育教師の日常生活の諸場面における生活を主観的・抽象的にとらえて比較したものが少なくないし、そうした差異が醸成される背景を解明するための研究もほとんどなされていない。

こゝ十数年の間に、なんらかのかたちで中・高等学校の体育教師の生活にアプローチした^{1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11)}ものとして、近藤、西垣、三枝、内山ら、千原ら、全国高校長協会ら、文部省、などの調査研究がある。これらの研究はたゞなり少なり他教科の教師と対比することによって体育教師の生活を浮き彫りにした点でそれなりの価値をもっているが、分析の視点が生活のある側面に限定されているがために部分的特殊的であり、体育教師の生活実態を総合的に把握しているとはいへない。したがって、たとえば体育教師の生活時間を分析しても、それは単なる表面的な現象の把握にとどまり、体育教師の多くが連日遅くまで学校に居残って部活動指導を中心とした教育活動をおこなっているといった、いわば体育教師の習慣的な生活行動のパターンやその形成機制構造、さらにはそういった生活行動が体育教師の生活意識や生活構造とどのような関連をもっているか、などといった点についてはほとんど解明されていない。

本研究の目的は、このような体育教師の生活に関する調査研究の経過をふまえて、体育教師の生活実態を体系的・構造的に把握し分析することにあるが、本稿ではとくに、①体育教師と他教科教師の生活内容に差異があるかどうか、あるとすればその具体的内容はな

にか、②体育教師の生活パターンを解明する糸口として部活動指導と教師生活満足度を規制している諸要因を分析するとともに、そこに体育教師と他教科教師とでは差異があるかどうか、の2点に焦点をしばって検討することにした。

なお、生活実態を体系的・構造的に把握し、それを解明する方法として今日重視されている生活構造論には、それぞれの学問分野においてさまざまなタイプがあって、それらはまだ統一的な理論に統合されているわけではないが、本研究では、この生活構造論を手がかりとして、体育教師の生活の実態を総合的に把握・分析しようと試みた。そして、調査の理論的枠組としては、青井氏らが東京都民の日常生活の実態・意識の把握を目的におこなった「生活構造に関する研究調査」¹²⁾に用いた分析モデルに全面的に負うことにしたが、それはなによりも生活実態分析にとってこの青井モデルが¹³⁾、もっともすぐれたものであると考えたからである。

調査の概要と調査対象の性格

前述の如く本研究では、調査の理論的枠組として青井モデルを利用することにしたが、具体的な調査項目の選定にあたっては、予備調査¹⁴⁾を実施し、教師の生活内容がより具体的に把握できるように努めた。その結果、最終的には調査の項目は表2に示すようなものを含めて69となった。それぞれの項目は、環境・状況枠・物財体系・社会体系・文化体系・生活行為・パーソナリティ体系別に分けられているが、実際には、たとえば「通勤時間」の場合、それを家庭と職場との距離をあらわす指標とすれば「空間」の問題となり、生活時間の一部だとすれば「時間」の問題となるし、生活行為の項目は、同時に規制要素を示す項目ともなるように2つ以上にまたがる項目が多い。しかし、スペースの関係もあって、同表では生活行為を除く他の従の項目および有意差の検定をしなかった項目はほとんど割愛

表1 調査対象者の性格

		体育教師	他教科教師	備考
		100.0 (220)	100.0 (110)	(X ² 検定)
年 令 別	～ 24	6.8	5.5	P<0.20
	25 ～ 29	30.5	30.0	
	30 ～ 34	43.6	35.5	
	35 ～ 39	19.1	29.1	
未 既 婚 別	未 婚	18.6	21.8	P<0.30
	既 婚	81.4	78.2	
勤 務 校 の 特 性	所在地 30万～	28.6	20.9	P<0.50
	10 ～ 29	22.3	25.5	
	の人口 3 ～ 9	31.4	34.5	
	～ 3	17.7	19.1	
課 程 別	普 通	40.9	35.5	P<0.30
	普 ・ 職	21.4	20.9	
	別 職 業	35.5	42.7	

した。

調査は、1972年1月から2月にかけて、愛知・岐阜両県所在の全日制公立高校に勤務する教諭を対象に、両県の昭和46年度教育関係職員録により、体育教師は該当者全員を対象とする悉皆調査で、また、他教科教師は等間隔抽出(1/10)による標本調査で、いずれも郵送質問紙法により実施した。

有効調査票回収率は、体育教師43.4%(325/749)、他教科教師42.5%(274/645)であったが、両者の調査票の性格について検定をおこなった結果、性別・年齢別・未既婚別などの基礎的事項に有意差がみられたので、本稿では、20・30代の男子教師(体育教師220、他教科教師110)の調査票に限定して集計をおこなった。

両者の調査対象の性格は表1のとおりである。

集計の方法は、まず体育教師と他教科教師の生活の差異の有無を検証するために、69の調査項目のうち表2に示すような53の項目についてカイ自乗検定をおこない、危険率5%以下のものを有意差ありとした。つぎに、部活動指導および教師生活満足度と他の項目間のクロス集計をおこない、カイ自乗検定による項目間の関連性の検定の結果、危険率5%以下のものを関連ありとし、さらに関連の強さをみるためにクラマー関連係数(Cramèr's coefficient of contingency)を求めた。ただし、クラマー係数は他の contingency 係数¹⁵⁾とオーダーが異なるのでその平方根で示した。

調査の結果

1 調査項目別にみた体育教師と他教科教師の生活内容の比較

体育教師と他教科教師の生活内容の差異を具体的に把握するために、本調査の69の項目のうち、基礎的事項や環境の項目などを除く53の項目について有意差検定をおこなった。その結果表2に示すような34の項目に有意差がみられたので、それらの項目を中心に順を追って概観する。

なお、それぞれの調査項目の集計結果のうち、本文中に示さなかったものは、巻末の資料に一括した。

1) 生活行動の時間と空間

〈勤務時間と退勤時刻〉体育教師と他教科教師の勤務時間や退勤時刻(こゝでいう「退勤時刻」とは、教師が学校を出る時刻をさす。)は、季節に関係なく顕著な差がみられるが、これを春夏期における退勤時刻についてみると、体育教師の退勤率は時間の経過とともに

表 2 調査項目別にみた体育教師と他教科教師の有意差検定の結果

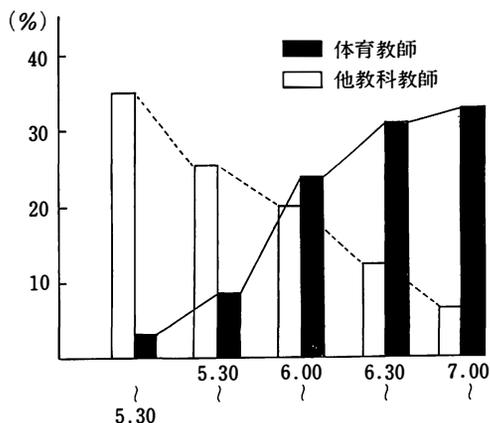
			調 査 項 目	df	X ²	P	備 考	
生 活 体 系	状 況	生	退 勤 時 刻 (冬)	2	65.134	***	図 1	
			" (春夏)	{ 4	99.026	***		
			" (") ●	{ 4	52.140	***		
			在 校 時 間 (冬)	3	89.093	***		
			平 日 の 自 由 時 間	4	14.288	***		
		活	平 日 の 自 由 行 動 (1位)	4	15.440	***	表 6	
			放 課 後 の 活 動 (1位)	{ 4	93.975	***		
			" (") ●	{ 3	38.923	***		
			エ ネ ル ギ ー 配 分 I -学校-	3	14.773	***		
			" -家庭-	3	20.645	***		
	時 間	時	" -余暇-	3	13.941	***	図 3	
			エ ネ ル ギ ー 配 分 II -授業-	{ 4	17.452	***		
			" " ●	{ 4	16.595	***		
			" -部 -	{ 3	83.642	***		
			" " ●	{ 3	63.457	***		
		間	" -校務-	{ 4	13.399	***	図 4 (表7)	
			" " ●	{ 4	1.870			
			部 活 動 の 指 導	{ 2	111.614	***		
			" ●	{ 2	75.875	***		
			部 活 動 指 導 時 間(冬)	3	45.415	***		
系	外 的 規 制 要 素	財 務 状 況	所 帯 月 収 (1月)	3	3.551		表 8	
			住 居 費	3	2.412			
			研 修 費 (月額)	3	15.592	***		
			収 入 満 足 度	3	1.830			
			ア ル バ イ ト の 有 無	1	24.110	***		
	生 活 段	社 会 体 系	住 居 の 形 態	収 入 手 段	1	0.015		表 9
				住 居 の 形 態	1	3.829		
				家 族 構 成	3	1.476		
				子 ども の 数	3	1.385		
				職 業 の 魅 力	3	0.559		
教 師 の 力	2	0.282						

生 活 体 系	外 社 会 体 規 制	社 会 体 系	役割構造	能力の自己実現	2	7.393	*	表11	
				教師の社会的地位	2	7.881	**	表12	
				教科の軽視	3	1.496		表10	
			社 会 体 系 関 係	組合加入	1	14.337	***	表13	
				組合会議への参加	2	8.145	**	表14	
				各種団体への参加	1	18.848	***		
				職場の人間関係	3	0.330			
				同僚との対話	2	2.396			
				生徒との対話	3	19.363	***	表16	
		父兄の教育関心		4	11.282	*			
		生徒満足度		3	5.121				
		職場満足度	3	4.559					
		職場の管理体制	3	35.343	***	表15			
		要 素 体 系	文 化 規 範	生活規範	教育の社会的貢献度	3	4.827		
				私生活制限	4	7.379			
	政治的斗争参加禁止			3	15.654	***	表17		
	階層帰属意識			2	18.792	***	表19		
	階級の判断の基準			2	5.397		表20		
	労働者意識			3	11.567	***	表18		
	情 報 系	ル ー ト	新聞の購読内容(1位)	3	55.098	***	表21		
			生活行為	(平日の自由行動) (放課後の活動) (エネルギー配分Ⅰ、Ⅱ) (部活動指導) (組合加入) (組合会議への参加) (各種団体への参加) (同僚や生徒との対話) (アルバイト)など					
内 的 規 制 要 素	パ ー ソ ナ リ テ ィ 体 系	社会的背景	年齢・性・未既婚など						
		生活意識	生活のめあて	4	7.359		表24		
		仕事か生活か	1	0.589					
		生きがい	2	11.836	***	表25			
		部活動指導意識	2	45.564	***	表22			
		教師生活満足度	4	15.810	***	表23			

- 注 ① 表中の●印のついたものは 運動部顧問のみの有意差検定。
 ② 備考欄の図表番号は本文中の図表の番号をしめす。
 ③ 表中*……P<0.05、**……P<0.02、***……P<0.01
 ④ 「環境」に該当する調査項目は紙面の関係ですべて割愛してある。

増加しているのに対し、他教科教師の場合は全く逆の傾向をみせている(図1)。すなわち、午後5時30分までに他教科教師の1/3以上がすでに退勤しているのに対し、体育教師の同時刻までの退勤率はわずか3%にすぎない。逆に、7時以後の退勤率は体育教師33.2%、他教科教師6.4%であり、両者はきわめて対照的であることがわかる。

図1 退勤時刻(春夏期—5~9月—)



〈放課後のしごとの内容〉 そこで、授業後の教師のしごとの内容についてみ

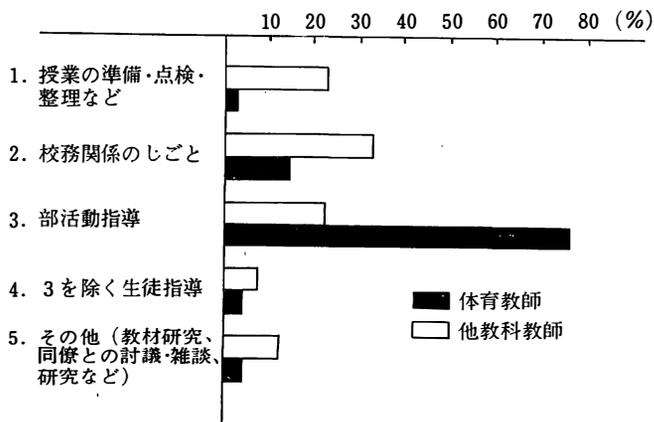
ると、体育教師では部活動指導を第1位にあげるものが75.9%と圧倒的に多い。これに対して他教科教師の場合は校務関係のしごと(32.7%)、授業の準備・点検・整理(22.7%)、部活動指導(21.8%)となっており、放課後のしごとの内容にも顕著な差異を見出すことができる(図2)。

〈部活動指導の程度—回数と時間—〉 このように体育教師の場合は、放課後のしごととして部活動指導の占める割合が高いが、これを指導の程度からみても顕著な差がみられる。すなわち、体育教師の約80%がほとんど毎日部活動指導をおこなっているのに対し、他教科教師ではその割合は21%にすぎない(表3)。また、回数と時間をクロスさせて各マスを対象数で割ってみると、ほとんど毎日2時間以上部活動を指導している体育教師が約73%もいることがわかる(表4)。そのために、

図2 放課後のしごとの内容(第1位)

部活動指導によって家庭生活や自由時間がかなり犠牲になっているとするものは体育教師に圧倒的に多い(表5)。

〈平日の自由時間と自由行動〉 また、平日の自由時間の平均は、体育教師約2.3時間、他教科



教師約2.6時間となっており、体育教師の方が有意に少ない。もっとも、前述の退勤時刻と関連させてみるとむしろ両者の差は少ないとも思われるが、これは退勤時刻は春夏期を、平日の自由時間は冬期（1月）についてみた、という理由によるものと思われる。

また、この自由時間における行動についてみても差異があり、体育教師の場合は「家族団らん・子どもの相手」や「ラジオ・テレビ・レコードの視聴」といったどちらかといえば受身の気晴らし・休息的な活動が多いのに対し、他教科教師の場合は「学校のしごと・教材研究」「読書・研究・勉強」といった積極的な活動が目立つ（表6）。

このことから、体育教師の自由時間はおもに心身の疲労を回復するための気晴らしや休息にあてられているとみてよからう。

〈エネルギーの配分〉最後に、日々のさまざまな生活場面に投入されているエネルギーの配分を、一日の生活と学校でのしごとに分けてみてみよう。

まず、一日の生活を、学校（しごと）・家庭・余暇の3つに分けてみると、体育教師は他教科教師と比較して学校に多くのエネルギーを投入し、家庭・余暇へは少ない（図3）。つぎに、学校でのしごとを、授業関係・部活動関係・校務関係の3つに分けてみると、体

表3 部活動の指導（回数）

		ほとんど毎日	週1~2回程度	試合・会合のみ
体育教師	220	79.5	16.8	3.2
他教科教師	108	21.3	39.8	35.2
計	328	60.4	24.4	13.7

注 本文の表ではD・Kはすべて除いてあるので100.0%にならない場合がある。

表4 部活動指導の「回数」×「時間」

	時間	回数		
		120分未満	120分~180分	180分以上
体育教師	ほとんど毎日	6.4	43.6	29.5
	週1~2回	5.0	10.0	1.4
他教科教師	ほとんど毎日	5.6	9.3	6.5
	週1~2回	16.7	19.4	3.7

注 「試合や会合のみ出席」は除く、また、対象数は体育教師220、他教科教師108

表5 部活動指導による家庭生活、自由時間への影響

		かたがちな犠牲性	あなごころの犠牲性	どなたとていかに
体育教師	220	53.2	35.0	11.4
他教科教師	108	16.7	47.2	32.4
計	328	41.2	39.0	18.3

表6 平日の自由行動—第1位—

		学校教材の研究	読書・研究・勉強	家族との団らん	テレビ・レコード・ラジオの視聴	交際・友人・他
体育教師	220	18.2	11.4	30.9	27.3	8.6
他教科教師	110	29.1	21.8	26.4	14.5	6.4
計	330	21.8	14.8	29.4	23.0	7.9

図3 エネルギーの配分 I
 <学校：家庭：余暇>

体育教師	67	18	15
	学校	家庭	余暇
他教科教師	63	20	17

図4 エネルギーの配分 II
 <授業：部活動：校務>

体育教師	46	29	25
	I	II	III
他教科教師	52	17	31

- I：授業、教材研究、授業のための準備・点検・整理など
- II：部活動の指導
- III：校務関係のしごとや雑務

表7 部活動指導と授業へのエネルギーの配分

		授業 ∨ 部活動	授業 ∥ 部活動	授業 ∧ 部活動
体育教師	220	70.9	13.6	15.5
他教科教師	108	92.6	5.6	1.9
計	328	78.0	11.0	11.0

育教師は他教科教師と比較して、部活動指導に多くのエネルギーを投入し、授業・校務へは少なくなっている(図4)。また、授業と部活動へのエネルギー配分に限定してみると、授業≤部活動型は体育教師に圧倒的に多い(表7)。つまり、体育教師の1/3近くのもの部活動指導に授業と同等あるいはそれ以上のエネルギーを投入していることになる。

2) 家計状況と生活手段

物財の体系は生活を構造化せしめると、もにその世帯の階層的位置を規定する主要な要素であるが、教師という同一職業を対象者とする調査だけに、項目別に見る限り、所帯の月収、住居費、収入生段、住居の所態、収入満足度、などについて体育教師と他教科教師との間に差異は見出されない。たゞ、教材研究や自己研修のために支出される月平均の費用が、体育教師約3千円に対し他教科教師約4千円、と約1千円の差があること(表8)、家庭教師とか塾の教師などのアルバイトをしているものが、体育教師5.5%に対し、他教科教師では23.6%と多いこと(表9)、の2点に差異が認められるにすぎない。

表8 研修費一月平均

		研修費			アルバイトの有無	
		<2千未満	2~4千	4~6千	あり	なし
体育教師	220	30.5	45.9	16.8	5.5	94.1
他教科教師	110	16.4	43.6	25.5	14.5	75.5
計	330	25.8	45.2	19.7	8.5	87.9

表9 アルバイトの有無

3) 役割構造と社会関係

1) でみた如く、体育教師と他教科教師の生活行動にはいくつかの点で差異が見出されるが、このような生活行動は、一般に、動機づけを起動力として「役割」と「規範」に規制されながら「手段・便益」を利用して「目標」達成に向かって進んでいくと考えられるから、両者の生活行動にみられる差異の背景を解明する糸口のひとつとして、こうした役割とか規範とか手段・便益といったものに両者の間で差異があるかどうかを分析することも大切である。こゝでは、役割構造と社会関係に分けてみてみよう。

〈役割構造〉 職業の魅力、教師の力、教科の軽視、などについては体育教師と他教科教師との間に差異はみられない。すなわち、教師という職業の魅力に対しては両者とも75%前後の教師が「気に入っている」と回答している。また、教師と子どもの人格や学力や技能との関係についても両者の回答にほとんど差異がなく、約45%前後の教師が子どもの人格・学力というものは本人・家庭・社会の影響力が決定的であると回答している。さらに、現在の高校教育では特定の教科科目が軽視されがちである、という意見に対しても、両者の約70%前後の教師がこの意見に肯定的反応を示している。しかし、このことは普通高校でも職業高校でも保健体育科目が軽視されがちであるという現状を、当該科目の担当者である体育教師ばかりでなく、他教科教師も是認しているということを示唆しているという点で注目される（表10）。

表10 教科の軽視

意見 内容	「現在の高校教育では、一般に普通高校の場合大学の受験科目に関係のない教科が、また、職業高校では専門教科以外の教科が軽視されている」					
	積肯 極的定	消肯 極的定	中間 的	消否 極的定	積否 極的定	
体育教師	220	33.6	39.5	11.4	12.3	2.3
他教科教師	110	32.7	36.4	8.2	17.3	0.9
計	330	33.3	38.5	10.3	13.9	1.8

しかし、能力の自己実現や教師の社会的地位については両者に差異がみられる。つまり、自分の能力が現在の職場で生かされているとするものや、教師の社会的地位に対する

表11 能力の自己実現

		生い か さ れ て	ど い ち え ら な い も	生い か さ い れ て	高 い	ど い ち え ら な い も	低 い
体育教師	220	46.4	32.7	20.9	45.5	46.8	6.8
他教科教師	110	30.9	40.0	29.1	31.8	54.5	13.6
計	330	41.2	35.2	23.6	40.9	49.4	9.1

表12 教師の社会的地位
(地域住民の教師という職業に対する評価)

表13 教職員組合への加入

	加 入	未 加 入
体育教師	220	47.3
他教科教師	110	24.5
計	330	39.7

表14 職場の組合会議への参加状況

	積 極 的 に 参 加	大 体 参 加	あ と し ま ん ど い ・ 参 ほ
体育教師	112	49.1	24.1
他教科教師	77	37.7	15.6
計	189	44.4	20.6

地域住民の評価は高いとするものが、いずれも体育教師に多い（表11, 12）。

〈社会関係〉 まず、教職員組合との関係についてみると、体育教師は他教科教師と比較して組合への加入者が少ないし、同じ組合員であっても職場での組合会議への参加状況はかんばしくない（表13, 14）。

つぎに、職場での人間関係や同僚との対話あるいは職員会議の運営や校務分掌の決定などに対する職場満足度、などについてみると両者の間に差異はみられない。しかし、職場での管理体制に対する認識程度には差異があり、以前と比較して管理体制が強化されたとするものは体育教師に少なく他教科教師に圧倒的に多い（表15）。

また、生徒の能力・意欲・態度などについては、両者とも約70%近くのものが高くないと回答しており差異はみられない。しかし、生徒との対話という点では差異があり、体育教師の方が授業以外の場面で生徒との対話が多くなっている（表16）。

さらに、学外の民間教育団体・研究サークル、宗教団体、体育・スポーツ団体、趣味・その他、などの各種団体への加入は、体育教師の方が多いが、これは体育教師の多くが地域の体育・スポーツ団体に関与しているためである。

4) 生活規範と情

報ルート

〈生活規範〉 筆者はかつて、教師の教職意識を、教師の職業、政治的意識、生活倫理の3つのカテゴリーから分析を試みたことがあるが

表15 職場の管理体制の強化

	非 常 に 強 く	ま あ た 強 く な	ど い ち え ら な い も	以 り ど 前 と あ ま ん い	よ く 方 話 を す	ま る 方 話 を す	ど い ち え ら な い も	あ と し ま ん ど い ・ 話 方 ほ	
体育教師	220	12.7	28.2	34.1	24.5	34.1	45.0	10.9	9.5
他教科教師	110	26.4	48.2	17.3	7.3	13.6	52.7	12.7	20.9
計	330	17.3	34.8	28.5	18.8	27.3	47.6	11.5	13.3

表16 生徒との対話

(授業やH・Rを除く)

このような教職意識や教育の効果に対する意識あるいは階層帰属意識といったようなものは、教師の日々の生活のあり方を知らず知らずのうちに方向づけていくものである。

そこで、まず教師の政治的斗争と教師の労働者性および教師の私生活制限、のそれぞれに対する意識についてみると、教師の政治的斗争参加禁止に対しては両者はきわめて対照的な反応を示している。すなわち、体育教師では政治的斗争参加禁止を肯定するものが否定するものを上回っているのに対し、他教科教師では逆の傾向を示している（表17）。また、教師の労働者性についても両者の間では差異があり、体育教師では、教師は学校を職場として働らく労働者である、という意見に中間的否定的反応を示すものが多い（表

表17 教師の政治的闘争参加禁止

表18 教師の労働者性

	意見 内容	「教師は政治的色彩の強い斗争には参加すべきではない」					「教師は学校を職場として働らく労働者であるから自己が労働者であることを誇りとすべきだ」			
		積肯 極 的定	消肯 極 的定	中 間 的	消否 極 的定	積否 極 的定	積肯 極 的定	消肯 極 的定	中 間 的	否 定
体育教師	220	29.5	20.9	8.6	30.9	9.5	9.5	31.8	35.9	21.4
他教科教師	110	16.4	19.1	—	36.4	23.6	20.9	37.3	25.5	15.5
計	330	25.2	20.3	5.8	32.7	14.2	13.3	33.6	32.4	19.4

18)。しかし、教師が他の職業の人と比較して私生活の面でその言動がある程度制限されることはやむをえない、という意見に対しては両者の間に差異はなく、いずれも50%前後の教師が肯定的反応を示している。この3つの意見は、1968年に名古屋市内の公立私立高校

の教師を対象におこなった調査と同じ内容のものであったが、結果的にはほとんど変わらない¹⁶⁾。前回と比較して調査対象の性格に若干の違いはあるにしてもほぼ同じような結果を得たことから考え

表19 階層帰属意識

表20 階層の判断の基準

	中 上 上	中	中 下 下	職 業	収 入	学・・産 歴交土・ ・友地 ・家関・ 柄係財他	
							体育教師
他教科教師	110	11.8	41.8	38.2	25.9	52.8	18.5
計	330	16.1	50.3	23.6	30.3	42.1	20.9

て、体育教師は教師の政治的斗争参加や教師の労働者性に対して他教科教師と比較して、中間的否定的態度をとるものが多いとみてよい。

つぎに、階層帰属意識とその判断の基準要因についてみると、階層帰属は体育教師の方が有意にいくらか高い(表19)。しかし、階層を判断するための要因としては、他教科教師の半数以上が収入を、体育教師では収入と職業をあげているが、とくに両者の間に差異はみられない(表20)。

さらに、教育というしごとの社会的貢献度についても両者の間に差異はみられず、体育教師の約68%、他教科教師の約57%が、いずれも現在の社会に対して教育というしごとが役立っていると回答している。

〈情報ルート〉 こゝでは、情報ルートの代表として新聞をとりあげ、その購読内容についてみると、両者の間に差異があり、もっとも興味や関心をもって読む記事は、体育教師ではスポーツ記事を、他教科教師では政治・経済記事となっている(表21)。

表21 新聞の購読内容(第1位)

		学・家・庭・教育	スポーツ	政治・経済	社説・面・その他
体育教師	220	15.0	49.5	20.9	10.9
他教科教師	110	24.5	8.2	45.5	13.6
計	330	18.2	35.8	29.1	11.8

5) 生活意識

生活行動の規制要素のなかには、行為を内から規制するものと外から規制するものがあるが、生活意識は、性別・続柄・年齢・職業・未既婚、などの個人の社会的背景とともに生活行動を内から規制するものであるから、体育教師の生活行動を解明する際のひとつの視点として重要な意味をもっている。

ここで
は、生活意識の項目として
教師生活満足度と
部活動指導意識および生き

表22 部活動指導意識

表23 教師生活満足度 ※

		生きがい型	楽しみ型	談型務・校務	非常に満足	まあ満足	どいちらないも	少し不満	非常に不満
体育教師	220	36.4	43.6	14.5	8.6	55.5	16.4	15.9	3.6
他教科教師	108	10.2	37.0	44.4	5.5	45.5	31.8	9.1	8.2
計	328	27.7	41.5	24.4	7.6	52.1	21.5	13.6	5.2

※ 他教科教師 N=110, 計N=330

がい、生活のめあて、仕事か生活か、をとり上げてみてみよう。

〈部活動指導意識と教師生活満足度〉 1) で他教科の教師と比較して体育教師が学校(しごと)や部活動指導に多くのエネルギーを投入し、遅くまで学校に居残っていることを明らかにしたが、このような体育教師の生活を内から規制している要因のひとつとして考えられる部活動指導に対する意識についてみると、体育教師の1/3以上のものが活部動に「生きがいをとても感じて指導している」〈生きがい型〉のに対し、他教科教師の場合は「生きがいも楽しみもそれほど感じないが顧問の義務だと思って指導している」「あまり気がすすまないが校務なので仕方なく指導している」〈義務・校務型〉とするものが44.4%も占め、両者の間には顕著な差異がみられる(表22)。また、現在の教師生活に満足を感じているものについてみても体育教師の方が有意に多い(表23)。

〈生きがい・生活のめあて・仕事か生活か〉 まず、仕事と生活との関係についてみる

表24 生活のめあて

表25 生きがい

		家庭型	享 楽 型	献 身 型		物質型	感 じ て い る	ど ち ら と も い え な	感 じ て い な い
		家康自成長と 族に分長をねが そくの子をど らうすとも う健康	そ愉と休ゆと の快日ぶ 日にやん そす余楽 のそ暇し 日をむ をこ	仕ち 事こ やむ 勉こ 強に う	他のと 人た のめ たに 働 社 会	収やそ 入すの やこ他 財と 産を ふ			
体育教師	220	51.8	7.7	20.9	6.4	9.1	64.1	30.9	4.5
他教科教師	110	36.4	8.2	31.8	6.4	9.1	44.5	49.1	6.4
計	330	46.7	7.9	24.5	6.4	9.1	57.6	37.0	5.2

と、体育教師の約85%、他教科教師の約79%が「仕事から得た収入で生活を楽しむよりも仕事そのものに生きがいを感じたい」と回答しており、両者とも仕事に強く志向していることがわかる。また、日々の生活を送っていく場合の心がまえとかめあてについても「家族そろって健康にくらすこと」「自分の子どもの教育に力を入れ成長を願うこと」といった〈家庭型〉が体育教師に、「仕事や勉強にうちこむこと」といった〈献身型〉が他教科教師に、いずれもいくらか多い程度で差異はみられない(表24)。しかし、全体としての生活の生きがいについてみると、両者の間には顕著な差異がみられ、生きがいを感じていると回答したものは体育教師64.1%に対し、他教科教師44.5%となっており、体育教師の方が生きがい感が強い(表25)。

2. 生活体系の構造的比較一部活動指導と教師生活満足度を中心として一

1では、体育教師と他教科教師の生活をいろいろな角度から比較してきたが、それはいわば両者の生活内容を個別的にとりあげて比較しその差異を指摘するにとどまり、主要な柱をたててそれを構造的に把握したわけではなかった。

そこでここでは、体育教師の生活のなかで大きな比重を占めている「部活動指導」と学校での個々の生活の満足度を総括するものとしての全体的な「教師生活満足度」を取りあげて、その構造を分析してみよう。

1) 部活動指導

すでに、1-1)で春夏期には90%近くの体育教師が午後6時以後に退勤し、かつ全体の約73%のものが連日2時間以上も部活動の指導をおこなっていることを指摘したが、このような生活行動を生み出している背景とそれが体育教師の生活のなかでどのようなかわりをもっているかを明らかにすることは、体育教師の生活パターンを解明する糸口のひとつとしてかなり重要な意味をもっていると思われる。

そこで、部活動指導と他の項目との関連をカイ自乗検定およびクラマーの関連係数で見ると表26のような結果を得た。

それによると、体育教師・他教科教師とも、部活動指導は「放課後のしごとの内容」「退勤時刻」「部活動指導意識」「家庭生活への影響」「部レベルⅠ（活動の状況）」と強い関連をもっていることがわかる。このことからみて、両者とも、部活動指導は部活動指導意識によって強く規制されながら、同時にそれ

表26 部活動指導と他の項目との関連度 (\sqrt{Cr})

体 育 教 師		他 教 科 教 師	
項 目	\sqrt{Cr}	項 目	\sqrt{Cr}
放 課 後 の し ご と	.467	部 活 動 指 導 意 識	.512
退 勤 時 刻	.326	放 課 後 の し ご と	.412
部 活 動 指 導 意 識	.299	退 勤 時 刻	.392
仕 事 か 生 活 か	.283	職 業 の 魅 力	.325
部 レ ベ ル Ⅱ (成 績)	.256	部 レ ベ ル Ⅰ (活 動 状 況)	.309
組 合 加 入	.252	生 き が い	.303
家 庭 生 活 ・ 自 由 時 間 へ の 影 響	.241	私 生 活 制 限	.295
部 活 動 指 導 時 間	.240	平 日 の 自 由 時 間	.292
部 レ ベ ル Ⅰ	.236	家 庭 生 活 ・ 自 由 時 間 へ の 影 響	.280
平 日 の 自 由 行 動	.194	労 働 者 意 識	.270
エ ネ ル ギ ー 配 分 (授 : 部)	.193	生 徒 と の 対 話	.261
政 治 的 斗 争 参 加 禁 止	.193	教 師 の 力	.222
未 既 婚	.184		

は、放課後の教育活動や退勤時刻さらには家庭生活をも規制しているものと考えられることができる。これを前述した体育教師の生活実態と関連させてもう少し具体的にみると、体育教師の部活動指導に対する生きがい・楽しみ感が、体育教師を連日、部活動指導に志向させるが、その結果として部の活動状況は活発になり、それがまた体育教師の指導意欲を一層助長させる。そのために、放課後のしごとは部活動指導が主体となって、授業の準備・点検・整理や校務関係などのしごとは二次的になり、これらは部活動指導後他の時間になされることになり、必然的に退勤時刻が遅くなったり、家庭生活にかなりの影響をおよぼすことになるのである。このようなプロセスを繰り返すことによってそれは固定化し、体育教師のひとつの生活パターンが形成されると思われる。一方、他教科教師の場合でも、部活動指導に生きがいを感じている教師の場合は体育教師と同じような生活パターンをもっていると考えられるが、他教科教師の多くは部活動指導に生きがいや楽しみをあまり感じない「校務・義務型」であるので、全体としてみれば体育教師とは対照的な生活パターンをもっているものと思われる。

さらに、体育教師の場合には、「仕事か生活か」「部レベルⅡ（成績）」「組合加入」などとも関連があるから、部活動の成果の認知（対外試合などでの成績）や教職員組合への加入、さらには仕事への強い志向、などが部活動指導という生活行動と相互に規制しあっているものと考えられる。一方、他教科教師の場合にも体育教師と違って「職業の魅力」「生きがい」「労働者意識」「私生活制限」などに関連をもっているが、これは教師という職業に対する魅力の度合や教師の労働者性に対する態度のちがいが部活動指導を規制する要因となり、かつ部活動指導それ自体が生きがいの高低を規制する要因のひとつともなっていることを示している。換言すれば、教師という職業に魅力を感じ、教師の労働者性に否定的中間的態度をもっているものほど毎日部活動指導をおこなっているものが多いことを示唆している。

いづれにしても、体育教師の生活パターンのうち、学校での生活行動のパターンは、この部活動指導とそれを強く規制している部活動指導意識とを中心とした綿密な分析によってかなり解明できるのではないと思われるが、これについてはいづれ稿を改めて論述するつもりである。

2) 教師生活満足度

他教科教師と比較して体育教師の方が現在の教師生活に満足を感じているものが多いが、ひとくちに教師生活満足度といっても、それはさまざまな要因から教師の満足度がなりたっている。

そこで部活動指導の場合と同じ手続きで教師生活満足度と他の項目との関連についてみると表27のようになった。

まず、体育教師・他教科教師ともに教師生活満足度と関連のある項目についてみると、「職業の魅力」「生きがい」「職場の満足度」「階層帰属意識」「教育の社会的貢献度」「収入満足度」「能力の自己実現」「生徒満足度」「私生活制限」「政治的斗争参加禁止」、ときわめて多くの要因と関連しているこ

とがわかる。このことからみて、一般的には、教師という職業に魅力を感じていること、職員会議の運営や校務分掌の決定などいわゆる職場のあり方に対する満足度が高いこと、自分の能力がじゅうぶん生かされていること、教育というしごとが現在の社会で役立っているという認識をもっていること、生徒の能力・意欲・態度などにそれほど不満を感じていないこと、世帯の収入に強い不満をもっていないこと、教師の私生活制限や政治的斗争参加禁止に対してそれほど強い抵抗感をもっていないこと、などの諸条件が満たされることによって教師生活満足度が高まってくるものと思われる。

ところで、両者とも関連のみられる項目のうち、「生きがい」を除く9項目のなかで両者に差異のみられる項目は、表2で示したように「階層帰属意識」「能力の自己実現」「政治的斗争参加禁止」の3項目にすぎないから、体育教師に比較して他教科教師の方が教師生活に満足しているものが少ないのは、この3項目のほかに、他教科教師のみ有意の関

表27 教師生活満足度と他の項目との関連度 ($\sqrt{C_r}$)

体育教師		他教科教師	
項目	$\sqrt{C_r}$	項目	$\sqrt{C_r}$
職業の魅力	.497	職業の魅力	.484
生きがい	.378	生きがい	.481
職場の満足度	.274	階層帰属意識	.467
職場の管理体制	.265	生徒との対話	.336
教育の社会的貢献度	.253	教師の社会的地位	.332
平日の自由行動	.226	私生活制限	.301
収入満足度	.220	教育の社会的貢献度	.300
階層帰属意識	.220	政治的斗争参加禁止	.300
政治的斗争参加禁止	.219	能力の自己実現	.296
能力の自己実現	.213	生徒満足度	.288
階層の判断の基準	.208	家庭生活・自由時間への影響	.279
教師の力	.199	収入満足度	.279
職場の人間関係	.199	職場の満足度	.269
部活動指導時間	.193	平日の自由時間	.262
生徒満足度	.186		
私生活制限	.184		
労働者意識	.179		

連にある「生徒との対話」「教師の社会的地位」「平日の自由時間」に関係があると思われる。つまり、両者の間の教師生活満足度の差は、他教科教師からみれば、教師の政治的斗争参加への禁止、階層帰属の低さ、能力が生かされていない、生徒との対話が思うようにできない、教師の社会的地位に対する地域住民の評価の低さ、自由時間の不足、などの不満に起因するところが大きいのではないかと思われる。

む す び

以上、ふじゅうぶんながら、体育教師と他教科教師の生活に関する調査から、両者の生活内容を個別的に比較検討し、そこにいくつかの注目すべき差異を見出すとともに、そのような差異を生起させている背景についても若干の知見と手がかりを得ることができた。むろん、本稿でとりあげたものは調査の集計結果の一部にすぎないから、本研究の目的である体育教師の生活の体系的・構造的把握と分析ができたわけでもないし、既存の研究成果とつき合せてじゅうぶんな比較検討を試みたりしたわけでもないが、体育教師の生活の一端をある程度は浮き彫りにできたのではないかと思う。そこで、本稿で明らかにしえた諸点のうちから2・3をとりあげ若干のコメントを加えてむすびとしたい。

必ずしも科学的な分析を通してではなかったが、従来から指摘されていた、体育教師は「家庭生活や自由時間を犠牲にしてまでも連日遅くまで学校に居残って部活動指導をおこなっている」「教職員組合に対して消極的である」「教育労働者意識が弱く教師の政治的闘争に消極的否定的である」、などの点が実証されたが、こうした体育教師の生活や意識のパターンが作り出される背景とそこに内包されている問題点についてある程度の知見がえられた。それを要約して説明すればつぎのようになる。

まず、連日遅くまで部活動指導をおこなっているという生活行動を支えているのは、なによりも部活動指導のなかに教師としての生きがいや楽しみが見出されるからである。つまり、部活動指導は体育教師にとって、家庭生活や自由時間を犠牲にしてでも教師としてやりがいのあるしごとであり、さらに体育教師としての力量が思う存分発揮できる場所なのである。だからこそ、部活動指導によって生活が多忙になったり心身ともにオーバーワークになっても、体育教師の多くは教師という職業に魅力を感じ能力の自己実現や教師生活に高い満足感をもっているのではなかろうか。しかし、こうした生活は一方では、内山らが指摘した「体育教師のほとんどが保健授業担当者であるにもかかわらず、保健の教材研究などにあてる時間的精神的余裕を見出すことが困難であることや家庭における研修時間も他教科の教師と比較して少ないこと¹⁷⁾」、つまり、教師として不可欠の研修時間を圧

迫している事実を見逃してはならない。部活動のもつ教育的価値を否定するものはいないが、教師はやはり教科指導（授業）に全力を投入すべきであり、そのための研修時間をじゅうぶん確保できるような生活を確立する必要がある。

つぎに、体育教師の多くが教職員組合に対して消極的な姿勢をとるようになった理由としては、教職員組合が教育労働者の立場にたって政治とのたたかいを強めてくるにつれて、体育教師の教育労働者意識や政治闘争に対する態度と組合のそれとの格差が拡大してきたことに一因があると考えられる。そして、これに拍車をかけたのが、日教組の1970年・第38定期大会における「教職員の労働時間と賃金のあり方」¹⁸⁾についての決定である。この決定で日教組は、時間短縮と教育労働者の権利主張という立場から、学校教育における課外クラブ（部活動）などの本務外教育活動の社会教育への移管を主張したが、社会教育への移管の是非はともかくとして、労働時間との関係から部活動指導時間の短縮が論議されたのである。その結果、従来のような部活動指導は少なくとも組合員の立場からは否定せざるを得なくなったために、部活動指導に生きがいや楽しみを見出していた体育教師の多くは自己矛盾に悩み、組合からの離脱ないしは消極的な姿勢をとるようになったものと思われる。しかし、こうした姿勢は確固とした信念とじゅうぶんな政治的識見にもとづいたものであれば問題はないが、そうでないと、こうした姿勢が一因となって教師集団のなかで体育教師の孤立化を招きかねない。しかし、こうしたことを判断するだけの資料は今回の調査ではえられていないので、今後に残された課題のひとつとしたい。

付 記

1. 本稿は、昭和46年度文部省科学研究費補助による研究の一部である。
2. 本稿は、日本体育学会第25回大会（1974年）で発表したものに若干加筆したものである。
3. 調査結果の統計的処理は、すべて名古屋大学大型計算機センターの FACOM230—60 を利用しておこなった。

註

- 1) 近藤義忠「体育教師の生活と意識」（第1報），体育学研究12—5，1968，P249，
- 2) 近藤義忠「体育教師の生活と意識」（第2報）—体育教師集団の機能的特質—，体育学研究，14—5，1970，P54
- 3) 西垣完彦「高等学校体育教師の生活」—その実態と問題点—，体育学研究13—5，1969，P P 390—391
- 4) 西垣完彦「体育教師の生活と意識」—その現実と問題点—，高校教育2—9，1969，P P32—41
- 5) 西垣完彦「高等学校教師の教職意識に関する一考察」，愛知県立芸術大学紀要3，1973，P P55

～74

- 6) 三枝忠一「体育教師の実態」, 学校体育23-13, 1970, P P38~44,
- 7) 内山源・吉池明子「保健教育における問題点と保健授業担当教員の勤務条件」, 学校体育 25-11, 1972, P P134~140
- 8) 千原英之進・間藤侑・新屋重彦「現代社会における体育教師の生活意識」, 日本体育大学紀要 3, 1973, P P35~54
- 9) 千原英之進・片山昇・新屋重彦「現代社会における体育教師の生活意識」Ⅱ, 日本体育大学紀要 4, 1974, P P41~55
- 10) 全国高等学校長協会・全国高等学校体育連盟「体育教師の実態調査」—他教科教師と比較して— 1964,
- 11) 文部省「昭和41年度教職員の勤務状況調査」, 文部時報, 1083, 1967, P P67~75
- 12) 生活構造研究会(代表者:青井和夫)「都民の生活構造と生活意識」, 1970
- 13) 詳細は, 前掲書 12), および, 青井和夫・松原治郎・副田義也編「生活構造の理論」, 有斐閣, 1971
- 14) 予備調査は, ①1971年6~8月, 中・高等学校の教師約50人を対象に面接聴取法による調査をおこない, その結果にもとづいて, ②同年11月, 中・高等学校教師を対象に郵送質問紙法による調査をおこなった。有効調査票の回収率31.8% (69/217)。
- 15) 安田三郎「社会統計学」, 丸善, 1969, P54
- 16) これについては, 西垣完彦 前掲5) 参照
- 17) 内山源・吉池明子 前掲7)
- 18) 詳細は日本教職員組合「教職員の労働時間と賃金のありかた」, 日本教職員組合, 1970

〔資料〕 注 ① D・K、N・Aはすべて除いてあるので100.0%にならないものもある。
 ② *印のついた項目の対象数は体育教師220、他教科教師108である。

表1 退勤時刻—冬期—

表2 在校時間—1月—

表3 退勤時刻—春夏期—

		500	600					5.30	6.00	6.30	7.00		
		}	}	}	}	}	}	}	}	}	}		
		500	600	8.30	9.00	9.30		5.30	6.00	6.30	7.00		
体育教師	220	9.5	43.6	50.5	4.1	14.5	20.9	60.5	3.2	8.2	23.6	30.9	33.2
他教科教師	110	32.7	54.5	12.7	31.8	30.0	25.5	12.7	35.5	25.5	20.0	12.7	6.4
計	330	14.8	47.3	37.9	13.3	19.7	23.4	41.5	13.9	13.9	22.4	24.8	24.2

表4 平日の自由時間

表5 放課後のしごと—1位—

		1 時間 未 満	1	2	3	4 時 間 以 上	1 点 検 の 準 備 理 な ど	2 校 務 関 係 の し	3 部 活 動 指 導	4 指 導 を 除 く 生 徒	5 そ の 他
体育教師	220	6.4	29.5	43.2	15.9	4.5	2.7	13.2	75.9	3.6	3.2
他教科教師	110	7.3	20.9	32.7	32.7	6.4	22.7	32.7	21.8	7.3	11.8
計	330	6.7	26.7	39.7	21.5	5.2	9.4	19.7	57.9	4.8	6.1

表6 エネルギーの配分Ⅰ—学校：家庭：余暇—

		学 校				家 庭				余 暇			
		5 割 以 下	6 割	7 割	8 割 以 上	0 割	1 割	2 割	3 割 以 上	0 割	1 割	2 割	3 割 以 上
体育教師	220	7.3	31.4	42.3	19.1	5.5	27.3	52.3	15.0	1.4	54.5	38.2	5.9
他教科教師	110	18.2	40.0	30.0	11.8	8.2	25.5	31.8	34.5	4.5	41.8	37.3	16.4
計	330	10.9	34.2	38.2	16.7	6.4	26.7	45.5	21.5	2.4	50.3	37.9	9.4

表7 エネルギーの配分Ⅱ—授業：部活動：校務—

		授業関係					*部活動関係				校務関係				
		3割以下	4割	5割	6割	7割以上	1割以下	2割	3割	4割以上	1割以下	2割	3割	4割	5割以上
体育教師	220	19.1	29.1	26.4	17.7	7.7	6.8	30.5	34.1	28.6	18.6	38.6	27.3	8.2	7.3
他教科教師	110	11.8	17.3	26.4	24.5	20.0	49.1	26.9	15.7	8.3	10.0	31.8	27.3	13.6	17.3
計	330	16.7	25.2	26.4	20.0	11.8	20.7	29.3	28.0	22.0	15.8	36.4	27.3	10.0	10.6

表8 *部活動指導時間—冬期—

表9 部活動指導時間—春夏期—

表10 通勤時間

		60分未満	60~90分	90~120分	120分以上	90分未満	90~120分	120~150分	150~180分	180分以上	30分未満	30~60分	60分以上
		体育教師	220	4.5	21.4	31.8	40.5	4.1	8.2	29.1	25.9	30.9	49.5
他教科教師	110	12.0	38.0	13.9	9.3	21.3	14.8	25.9	5.6	12.0	50.0	24.5	25.5
計	330	7.0	26.8	25.9	30.2	9.8	10.4	28.0	19.2	24.7	49.7	30.3	19.7

表11 世帯の月収—昭47.1—

表12 収入手段

表13 住居費(円)

表14 収入満足度

		7万未満	7~11万	11~15万	15万以上	自分1人で	2人以上で	4千未満	4~8千	8~12千	12千以上	非常に・まあ満足	どちらともいえない	少し不満	非常に不満
		体育教師	220	44.5	24.5	12.7	15.0	61.8	37.3	16.8	8.2	6.8	7.7	9.1	19.1
他教科教師	110	35.5	28.2	18.2	17.3	61.8	38.2	14.5	13.6	10.0	10.0	13.6	17.3	32.7	36.4
計	330	41.5	25.8	14.5	15.8	61.8	37.6	16.1	10.0	7.9	8.5	10.6	18.5	31.8	38.5

(円)持家および同居者を除く

表15 職業の魅力

表16 職場の満足度

表17 職場の人間関係

	非 常 に 気 に い っ て	ま あ る 方 に い っ て	ど ち ら と も い え	そ れ ほ ど ・ 全 く な い	職員会議の運営や校務分掌の決定などについて				非 常 に ま あ る 方 に い っ て	ど ち ら と も い え	あ ま り う ま い い っ て	全 く う ま い い っ て	
					非 常 に ま あ る 方 に い っ て	ど ち ら と も い え	少 し 不 満	非 常 に 不 満					
体育教師	220	20.5	55.0	16.8	7.7	20.5	30.9	30.0	18.2	43.6	23.6	25.0	7.3
他教科教師	110	19.1	52.7	20.0	8.2	20.0	27.3	24.5	28.2	43.6	22.7	24.5	9.1
計	330	20.0	54.2	17.9	7.9	20.3	29.7	28.2	21.5	43.6	23.3	24.8	7.9

表18 同僚との対話

表19 生徒に対する満足度

表20 教師の力

	よ く す る 方	ど ち ら と も い え	あ ま り し な い 方	非 常 に ま あ る 方 に い っ て	ど ち ら と も い え	少 し 不 満	全 く 不 満	教師は子どもを育てる力がある人					
								教 師 は 子 ど も を 変 え る 力 が あ る 人	こ と が 難 し い 人	学 力 ・ 技 能 は 変 え る 可 能 な 人	だ が 人 格 が 難 し い 人	人 格 ・ 家 庭 ・ 学 力 ・ 社 会 的 本 質 が 決 定 的 な 人	
体育教師	220	47.7	43.2	9.1	17.7	12.3	52.7	16.8	26.8	22.3	48.2		
他教科教師	110	53.6	34.5	11.8	13.6	20.0	45.5	20.9	26.4	23.6	43.6		
計	330	49.7	40.3	10.0	16.4	14.8	50.3	18.2	26.7	22.7	46.7		

表21 教育の社会的貢献度

表22 私生活制限

表23 各種団体への参加

表24 仕事か生活か

	非 常 に 役 立 つ て	い く ら か 役 立 つ て	ど ち ら と も い え	あ ま り つ て い な い ・ ほ と ん ど	教師は私生活の面で言動がある程度制限されるのはやむを得ない					参 加 し て い る	参 加 し て い な い	生 活 志 向	仕 事 志 向	
					積 極 的 肯 定	消 極 的 肯 定	中 間 的	消 極 的 否 定	積 極 的 否 定					
体育教師	220	18.6	50.0	17.3	12.7	10.0	45.9	9.5	20.5	13.6	62.3	36.8	13.6	84.5
他教科教師	110	11.8	45.5	25.5	11.8	12.7	36.4	3.6	25.5	18.2	35.5	60.0	16.4	79.1
計	330	16.4	48.5	20.0	12.4	10.9	42.7	7.6	22.1	15.2	53.3	44.5	14.5	82.7